



# めっき業界の「静かな有事」と未来

全鍍連 理事 藤井 大介

(福山メッキ工業株式会社／中国表面処理工業組合)

日本の製造業を根底で支えるめっき業界において、今、最も深刻かつ回避不能な「静かな有事」が進行しています。それは原材料価格の乱高下でも、厳格化する環境規制でもありません。「人の不在」がもたらす、取り返しのつかない技術の消失です。

依然として社会に根強く残る「きつい・汚い・危険」という3Kの刻印。薬品の独特な臭気、過酷な高温多湿、重量物の搬送といった断片的な情報が、デジタルネイティブ世代の若者にとって、就職の選択肢からこの産業を冷徹に排除する要因となっています。しかし、2026年現在の実態は劇的な変貌を遂げました。高度に自動化されたスマートライン、環境負荷を極限まで抑えたクリーンな循環システム、そしてAIによる超精密な品質管理。この「現実と虚像の乖離」を埋められないところこそが、採用難の深淵に横たわる真因と言えるでしょう。

さらに深刻なのは、単なる労働力の不足ではなく、長年培われてきた「熟練技能の断絶」です。めっきは単なる化学反応の積み重ねではありません。液の僅かな温度変化、濃度、電流の微細な揺らぎ。そして、熟練の職人が「色を見、音を聴き、空気を感じる」ことで到達する、数値化不可能な領域の直感に支えられてきました。今、多くの現場でこの「匠」

たちが引退の瀬戸際に立っています。

後継者なきまま彼らが現場を去れば、数十年、あるいは世紀を跨いで蓄積された独自のノウハウは、灯火が消えるように一夜にして失われます。これは一企業の衰退を意味するのではなく、日本のものづくりを象徴する「表面処理のDNA」が根絶されることを意味しています。一つの技術の消失は、それを利用する全ての産業チェーンの停止を招きかねないのです。

この窮地を脱するために必要なのは、待遇の改善という実利的な側面を超え、「めっきという仕事の定義」そのものを根底から書き換えるパラダイムシフトではないでしょうか。

「指示通りに製品を液に浸す作業員」という旧態依然とした定義を捨て、ナノレベルの皮膜を自在に操り、EVの動力性能や半導体の微細化を決定づける「マテリアル・サイエンティスト」としての矜持を提示すること。地味で目立たない「裏方」というレッテルを剥がし、無機質な素材に新たな命と機能を吹き込む「表面の魔術師」としての価値を社会へ発信し続けること。その知的な興奮と誇りこそが、次世代の若き才能を惹きつける唯一の、そして最も確かな道であると確信しています。